

JIA news kinki

翔

syo

no.104/2007

秋号





表紙写真：無題
素材：絹・銀箔・竹 益田 治子
上記写真は表紙写真の全体写真

表紙解説 - 「無題」

時の推移を感じるのが、とてもすき。

ひらひらと舞いながら散る桜の花びら。
黄緑色から茶色、焦げ茶色へと深みを増すどんぐり。

季節の変わり目には、
移ろいゆく時への名残惜しさと、新しく迎える時への
ほのかな期待とが交錯する。

CONTENTS

特集

- 「JIA近畿支部大会 / 建築祭2007兵庫
『建築と文学』メイン大会を終えて」
吉田文男 3

連載

- 「JIAデザイントーク」 本多友常 7
「住宅部会通信2007」 岡田良子 13
「都市点描」(未掲載) 馬場正哲

情報

新入会員紹介

- 「編集後記」 小南一郎 14

JIA近畿支部大会 / 建築祭2007兵庫 「建築と文学」

～ 時を重ね、人を魅了し、やがて情景となる ～ 10月24日(水)～11月4日(日)

メイン大会(11月2日)を終えて

吉田文男

(支部大会実行委員長)
(アトリエフォルム)



諸事情があって、近畿支部大会を兵庫でお受けすることになりましたが、準備を始めて直ぐに、大変なことを引き受けたものだ、今日に及んでも後悔しています。阪神淡路大震災の10周年事業を、建築関係4団体と兵庫県と協同で開催しました。そのときの10周年記念事業実行委員会の委員長として、約1年半の間、20数回に及ぶ委員会を開催し、メイン大会と各会合わせて5つの分科会を開催しました。その時に一つのまとまった事業を開催するのは大変なことだと骨身にしみてわかってはいたはずなのに。

大会まで半年足らずという日程から、何よりも優先して会場を確保するのが先決です。手当たり次第に10月から11月の期間、会場の開き情報を調べました。芸術の秋、文化の秋と言うことで、土日と祝祭日を含んだ会場は何れも予約が入ってふさがっていました。辛うじて祝祭日前後で空きがあった姫路駅前の「キャスパホール(320名収容)」と「イーグレひめじ」の特別展示室を見つけて申込みを済ませました。

一方大会テーマを決める必要があります。兵庫会の運営委員会で諮ったところ「建築と文学」が候補として浮上、支部の実行委員会に案として提示したところすんなりと決まってしまうました。兵庫会では5月の総会をプレ近畿支部大会と銘打って、イーグレ姫路のセミナー室で開催しました。総会の後、姫路文学館の学芸員の玉田係長に「建築と文学」と題した講演をいただきました。内容は司馬遼太郎と姫路城にまつわる話でした。なかなか面白い話で、これで近畿支部大会は上手くいくと確信を持ったのが甘い考えだったように思えます。

「文学と建築」という大会テーマは一見分かりやすいように思います。ところがどうして、突き詰めて考えると大変難解なテーマだどつくづく思います。兵庫県にゆかりの文学者や作家は羅列すればきりのないほどいますが、文学の場面に登場する建物を調べてみても、具体的な表現が先ず見あたりません。作家の生家といっても現存するものも少なく、生誕の地の標柱が建つ場所には、建物は既に無くなっていて、手繰った糸もすぐに裁ち消えてしまいます。要するに掴み所の少ないテーマであったようです。建築作品展の参加者、オープンジュリー応募者もことごとく頭を悩ませたことでしょう。前回の大阪大会のテーマも分かりづらいつ感じましたが、よくよく考えてみれば建物と環境は切り離すことのできない一体のもので、よく考えられたテーマだったと、支部大会を運営してみた今になって思います。「大会実行委員長が今更そんなことを」と言われるでしょうが、そこは近畿支部大会がなんとか無事に終えることができたということでご容赦いただければと思います。

大会テーマ「建築と文学」や、イベント内容とセミナーの内容が固まっ



「姫路文学館」メイン大会会場



「望景亭」建築作品展会場



「兵庫県立大学講堂」外観

てくると、それに相応しい会場と言うことと、折角の作品展示だから3~4日ではなくもう少し長くしたいという要望から、人通りが多いとか交通に便利というような条件を外し、違った観点から開催場所を選ぶことにしました。公的にオープンになっている会場は既に予約が入って無理、そこで「建築と文学」を素直に考えれば姫路市立文学館の講堂と望景亭、兵庫県立大学新在家キャンパスの講堂とセミナー室という案が浮上してきました。そこで会場の空き状況の確認と手配を、姫路コンベンションビューローをお願いいたしました。姫路の石見市長からは「近畿圏を包括した大会あるいは、それ以上の大会を是非とも姫路で開催していただけるようお願いしたい。その為にコンベンションビューローを立ち上げています」と以前に聞きしていました。官と民が人を出し合って構成されていますが、おもてなしの心を持った実是有能な人たちで、大変お世話になりました。城周辺の観光マップを含め多くの資料の提供を受けることができました。

メイン会場の文学館では、副館長と総務課長の特別の計らいで、会場貸し時間の延長、講堂内での飲食の許可、望景亭での作品展示と例外なくめで使用することができました。「JIAにお貸しして、結果を拝見させていただいた上で今後施設の貸し出し方法を考えてみたい」との話でしたが、後日お礼に伺った時に「JIAさんのような使い方ができることがわかって勉強になりました。今後の施設貸し出しについては、規約があるものの柔軟に対処していこうと思います」と喜んでもらったことは何よりです。

オープンジュリーの会場は兵庫県立大学の講堂（大正15年に完成）で、大正12年（1923年）に創立された旧制姫路高等学校の建物でした。国の登録有形文化財で姫路の都市景観重要建築物にもなっています。会場設営には志賀咲穂教授とゼミの学生達に手伝って貰って大いに助かりました。志賀教授からは「本校の学生にはまたとない刺激になりました」とおっしゃっていただきました。

テーマと会場が決まり、次は催しの内容です。メイン大会、最初は映像作家の藤原次郎氏に「継Heritageつなぐ心と技」と題して、江戸時代に郷宿だった生野町の古民家再生の記録映像を上映、その後、「関西文学」編集長の河内厚郎氏に「建築と風景、建築と町並み」と題した講演をお願いいたしました。その後、大会式典に移り、吉羽支部長の挨拶、石見利勝姫路市長の祝辞をいただいた後、オープンジュリー学生コンペの受賞者表彰と関西建築家大賞の受賞者の表彰です。関西建築家大賞を受賞した日建設計の江副敏史さん、改めて受賞おめでとうございます。記念講演では受賞者と審査建築家の対談が行われる予定？でしたが、出江さんの話が9に対して、江副さんの話が1だったというような印象を受けたのは私だけでしょうか？後日江副さんにお聞きすると「いや、思ったより話せましたよ」と言



兵庫県立大学 セミナー会場1



兵庫県立大学 セミナー会場2



オープンジュリー審査風景1



オープンジュリー審査風景2

われていました。思ったよりというのは、最初はどう思っていたのでしょうかねえ。出江さんのお話が長いのは、審査建築家として、江副さんの作品への最大限の評価の表れだと感じました。後の予定が無ければ出江さんの審査講評はあと1時間ぐらい続いていたかも知れませぬ。

セミナーについては、保存再生委員会の担当で、神戸大学足立裕司教授に「近代化遺産からみた兵庫県下の地域形成」。都市デザイン委員会の担当で、兵庫県立大学の宇高雄志准教授に「銀の馬車道～地域と記憶を繋ぐ」を計画していただき、詳細も順次決定していきました。アーキテクツサロンについては「世界文化遺産姫路城と語る」と題して、2人のガイドさんの案内で、来年から平成の大改修工事が始まる姫路城の見学を行うことになりました。

ほとんどのイベントはJIA会員に限らず一般の人の参加も受け付けることにしました。随一会員を対象にしたエクスカージョン書写山円教寺の魔尼殿、大講堂、常行堂、食堂の見学と、国宝の寿量院でいただく精進料理でしたが、残念ながら参加者が少なく、中止となったことは大変残念なことで心残りです。何れ機会があれば何らかの形で企画したいと思っています。

支部大会を私の地元姫路開催となったことで、近畿支部賛助会以外に地元姫路の企業の協力を得ようと広告掲載の依頼に奔走しました。姫路にも多くの日本を代表するような企業、名前が知れ渡った企業があります。それらの企業にJIA近畿支部大会の開催案内と広告協賛のお願いをして回りました。

ついてないというか、姫路には2008年4月から菓子博が予定されており、既に多くの企業に協賛や協力のお願い、前売りチケットの割り当て購入の依頼が回っていて、思うような回答を得ることができず歯がゆい状況でした。とはいうものの、普段接点のない企業にもJIAについて紹介する機会が得られたことは有意義なことでした。そのような状況の中でも知り合いの会社から、なんとか協力が得られたのは幸いでした。何事も日常の付き合いが大切だと言うことを改めて実感する機会にもなりました。

近畿支部大会はそもそも何のためにするのかということが重要になります。会員でありながら、普段から顔を会わせる機会が少ないところを、大会の催しを通して一堂に会すことの意味づけでもあり、JIAという団体が活動している身近な地域にアピールしていくことも重要な要素であると思います。そこでこの大会をできるだけ多くの方に周知徹底し、会場へ足を運んでもらうにはどうすれば良いかということになります。近畿支部大会といってもターゲットは兵庫県、それも姫路市と近郊の市町村に集約されます。前述のとおり、あえて開催会場を中心市街地から少し離れた場所にしたことが、結果として来場者数に影響したのではと思います。メイン会



メイン大会式典



関西建築家大賞 対談



建築作品展 会場展示風景



レセプションパーティー

場の文学館は認知度からいって不足はなかったものの、交通の利便性も含めて、大勢の方を会場へ誘う環境には辛いところがあったようです。

大会の会場周辺に、まとまった人数が一度に会食できる店舗がないため、姫路キャッスルホテルに大会当日のお弁当をお願いしました。姫路城の西に好古園があります。その中にあるお食事処「活水軒」を運営しています。姫路の名物の一つに伝助穴子というものがあります。姫路近海で捕れる穴子で超デカイものを「伝助穴子」と呼んでいます。お弁当はシンプルなもので、ご飯に穴子の白焼き風の焼穴子をのせ、あっさりしたタレをかけたお重です。折箱も底の深いもの特別に用意してもらえることになりました。大会10日前になっても注文の数が10個程度と予想していた数を大きく下回っていました。知り合いの副支配人には姫路を代表する食材で、立派なお弁当を100個ほど作って欲しいと、特別をお願いしていたこともあって恰好がつかません。事情を話してメイン大会前日の午前中まで待ってもらえることになりました。「数量はまとまらなくても作らせてもらいますよ」言ってもらえてホッとした次第です。当日の穴子弁当は肉厚の穴子がぎっしり上に乗った上品な味付けで、大会参加者から「今日のお弁当良かったね」「美味しかったよ」と声をかけてもらったのは嬉しい限りです。なにしろメニューにない一日限りの特注「幻のお弁当？」でしたから。

インフォメーションは、建築関連の団体については日常のネットワークを通じて行いました。一般参加者についても、公共の施設や「姫路観光ナビ」、「伝博堂」など市民や観光客を対象とした情報発信施設にチラシを置かせてもらい、「FM-GENNKI」という市民バンドに出演して、生放送で大会行事への参加を呼びかけました。市役所の記者クラブでの資料配布や、新聞社姫路支局へは個々にチラシを持参して説明、紙面掲載をお願いしました。建築系の学校に対しても働きかけをしました。メイン大会が平日ということもあって、思ったように会場へ足を運んでもらえなかったのは仕方がないことです。やはり一般の方を対象にした場合は休日が見やすいように思えます。そのためには会場確保も含めて1年前からの準備も必要かと思えます。特に地方都市では、今回の状況を踏まえ支部大会のあり方、大会運営の財源、お金のかからない大会運営の方法などを模索し、これからの事業の参考にしていく必要があると思います。作品展に関しては土曜、日曜日は平日と比べて来場者は多いものの、曾根地下や堂島アバンザのように大勢の人が行き交う場所で、見てもらえる会場の比ではありません。

一生懸命私達がPRしたことが、一般の方の「関心ごと」とイコールして、観て見たいということには繋がっていないということです。近畿支部大会という職能団体の総括的な行事と一般の方の興味には、相容れられない垣根が存在しているように思えてなりません。市民の方に建築は難しいもの、専門知識や技術の話は縁遠いものと思われぬように、建築についてもっと親しみやすく、もっと分かりやすく、もっと楽しく伝えていく責任が私たち建築家にあると思います。近畿支部大会をとおしているいろいろなことを考える良い機会であり学べる機会でもありました。今回の報告は私の動きを中心に、実行委員長として書かせていただきましたが、このような大会はもちろん一人の力ではどうすることもできません。支部大会運営にご尽力いただきました支部実行委員会の皆さま、各々部会、委員会の皆さま、兵庫会運営委員会の皆さまに感謝申し上げますとともに、大会に参加し支えて下さいました会員、賛助会の皆さま、来場くださいました市民の皆さまにこの場をお借りしてお礼申し上げます。

「JIAデザイントーク」

本多友常

デザイントークコメンテーター



第2回デザイントーク

開催日：2007年9月11日(火)

コメンテーター：

出江寛、木村博昭、小島孜、高砂正弘、本多友常

山本光良、吉村篤一

司会：青砥聖逸

会場：大阪市中央公会堂地下大会議室(共通)

第3回デザイントーク

開催日：2007年11月20日(火)

コメンテーター：

木村博昭、小島孜、長坂大、本多友常、山本光良

吉村篤一

司会：青砥聖逸

設計者にとって、どんな建築にも言い訳をしたいことは山ほどある。思いのほかの成功には、自分の先読みを語りたくなるものである。そこに加えられる多少の誇張も含めて、思いをかけて向かい合った意識の痕跡は、次の活動に繋がる糧にもなり反省にもなる。

デザイントークのような場において自分の仕事を披露することは、これら様々な内面のゆらぎを無防備に開くことでもあり、大きな精神の緊張とリスクを伴うに違いない。しかしその発表という形式を通して、創造性、インスピレーション、抽象操作、構築性などなど、創作にまつわるあらゆる側面が聴衆とともに共有される。

それは設計者ならずとも、万人が直面する存在の形とその意味を考えることであり、そこで交わされるトークの思考回路は、共同的な意識の醸成として、私たちの明日につながっている。設計者は、発注者との意見集約にとどまらず、広範囲にわたる社会的活動としての視野を求められ、あらゆる結果にたいする責任を負っている。

そこに求められる総合性は、ほぼ無限に近い条件の統合と、調整作業の集積として立ち現れることは言うまでもない。そこに妥協や逡巡の痕跡を垣間見る人もあれば、虚構性を介して、設計者の熱い想いを見る人もある。真摯な取り組みの偉大さと退屈さ、あるいは表現の本質に迫る生命感、あるいは軽薄感をさえ読み取る人もあるかもしれない。設計が結論を出す作業である以上、批評の表裏は必ず並存する。その建築を語る場としての赤裸々な意見交換について、今回は大阪市中央公会堂で開催された第2回と第3回の多角的な意見を要約し、報告させていただくこととする。

第2回デザイントーク(開催日2007年9月11日)

今回題材を提供していただく長坂氏は奈良女子大学で教鞭をとる建築家であり、片や岡本氏は日建設計で組織設計のリーダーとしてプロジェクトを推進しており、ものづくりの体勢として対比的な組み合わせとなった。

長坂大氏(奈良女子大学)

発表作品/岩見沢の家/小山の家

・岩見沢の家(北海道岩見沢市)

林業試験場に勤める夫妻のための、北海道に建つ北国の住宅である。建築は敷地の中央に置かれ、少しでも広い庭を確保するという一般的な発想はとられていない。家を中央に配置することにより、将来は敷地全体が林となり、家の周囲に樹木が取り巻く風景が構想され、新たに開発された住宅地における提案として、積極的な意図が打ち立てられている。

長坂氏は常に建築的発想の発端をヴァナキュラーに求めよう



「岩見沢の家」外観

デザイントーク

とする姿勢において、周辺環境から読み取るものは何かをさぐり、「地形」というキーワードが浮上させている。このきわめて具象的な、その反面きわめて抽象化されたキーワードは、牽強付会になりかねないきわどい概念操作を経つつも、岩見沢の家はその点において、切れ味の冴えた建築と言えそうだ。空間構成は2階吹き抜けのボリュームをもつ直方体に、三つの小さな部屋の塊を配置することにより、そこに生み出された空間の凹凸が、吹き抜けと2階床レベルを生み出している。抽象化された3つの異なる木材で作られたちいさな部屋の屋上にあたる2階の床には、その純正を際立たせるため、手摺は省略され、限りなく具象ともいふべき日常性の背景をなすべき空間からは切り離された、爽やかな違和感を発生させている。それは、日常的な部屋の取り方をわずかに逸脱する意思によって整合化され、建築設計における空間構成法の観点から見て、大きなボリュームに小さなボリュームが組み込まれる入れ子の関係を駆使し、そこに生まれる隆起をもった空間の連続性が、インテリアの連続性と分節化を同時に生み出している。その構築性が説得力を持っていたためか議論はむしろ建築の細部に集中し、「外壁に張られた小幅板の自然なテクスチャーが、硬くなりがちな直方体の建築を魅力的なものにしている」などの評価や「すがもれが起らないか？」など、寒冷地対策としての疑問が多く出され、北海道の極寒の地では、ほとんどその危険のないことが強調されるなど、近畿にとっては珍しい雪国の話題が展開された。コンセプトを際立たせることと、実態としての耐久性、安全性については生活者の判断によるべきものであり、建築家の説得力も含めて力強い建築的メッセージが発せられている内容であったといえる。

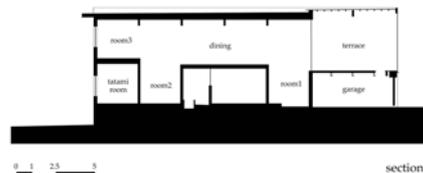
・小山の家（京都市北区）

一方小山の家では、風致地区という言葉が運ぶ一般的な期待感に対しては、それを逆なでする奇異な形が、対比的に提示された。鴨川の幹線道路沿いに位置し、水平の視線を斜め前方樹木の上部に焦点を合わせるようにそそり立ったバルコニーの手すりは、外部空間の上部をインテリアに取り込むことが強く意識されている。

一般的に風致地区が目指す景観形成の志と、その制限手法がもたらす宿命的な硬直化のはざまに、設計者は常に規制がもたらす負の側面に直面する。規制の結果、合法的に造られたまちなみを目の当たりにして、その有効性に疑問を抱き、最終的に導き出される建築的解答は自閉性を強めざるを得ないことが多い。この住宅がその問題意識に立ち向かい建築の解を求めたことは理解されたものの「異質なもののぶつかり合いにやや違和感あり」の意見が出され、風致が求める勾配屋根と断面計画から導



「岩見沢の家」内観



「岩見沢の家」断面



「小山の家」外観



「小山の家」内観

デザイントーク

かれる手すりの角度をぶつけた構成や、天空光を求めて上空に口をあけた形の是非の議論を通じ、建築家の意図とチャレンジ精神は十分賛同を得たものの、結果としてのまちなみにたいする環境形成の妥当性については、感想が分かれていた。

岡本隆氏（日建設計）

発表作品 / 総合地球環境学研究所

・総合地球環境学研究所（京都市北区）

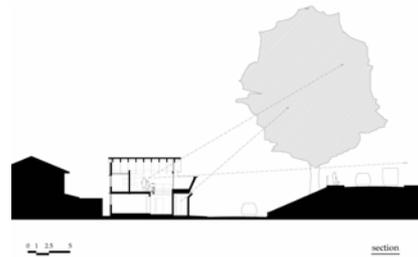
これに引き続きデザイントークのコメントーターでもある岡本隆氏から、地球環境問題を正面から取り組む研究施設として総合地球環境学研究所が披露された。このプロジェクト解説の前段として、岡本氏は十数年前に抱いた世界のエネルギー消費の急激な変化にたいする危機感を丁寧に辿りつつ、エネルギーに頼らない建築の在り方を説き、現代においては住宅が大きな課題になっていることに警鐘を鳴らしていた。

この建築にたいする考え方を大スケールで展開したのが総合地球学研究所である。敷地はもと京都大学の演習林として第一種風致地区に指定されたところに位置し、地球環境問題や人間の自然にたいするかかわり方を研究する研究者たちの活動の拠点として、建設された。

京都の北山に対する配慮から、高層化を避け2階建が横に広がることを選択し、外壁は道のインテリアとみなして板が貼られている。第一種風致地区での厳格な規制の中であって、保存緑地を残しつつ、狭い平坦地に容積の大きい建築を納めるせめぎ合いの結果が、大きく湾曲する建築形態になったという。

そのため境界線沿いの緑に充てられた残余空間が、かなり厳しく圧迫されている印象は拭いきれないものの、あくまでも緑のスカイラインを切ってしまう高層化を避け、低層案に踏みとどまった上での配置計画には、ほぼ全員の賛同を勝ち得ていた。この計画には、組織設計としてのメリットが十分に活かされており、環境・設備系の提案が数多く積み重ねられ、腰屋根換気の効果を得るためにコンピューター管理された開閉換気開口は、冷暖房時における空気の流れをシミュレーションした結果として提案されている。トップライトからの外光量は自動制御され、人工照明との併用により、理想的な拡散光が得られるように計画されているという。

いわば隙のない提案に、議論は行く手を阻まれつつ、それでもなおある物足りなさがコメントーターの中から発せられた。それはおそらく建築に自律的な強さを期待するうえで、それを組み立てる空間構成上の強い造形原理を求めたかった、という思いであったように見受けられる。しかし第一種風致地区における建築が、ほぼ屋根の形状、材料、壁の材料につい



「小山の家」断面



「総合地球環境学研究所」配置図



「総合地球環境学研究所」外観



「総合地球環境学研究所」内観

デザイントーク

での枠がはめられており、モダンを目指すより、板と瓦で環境を作る姿勢は総じて評価されるべきであるとの議論に傾いていた。

各部詳細の肌理細やかさにおいては安心感の有る建築となっており、与えられた条件下における設計技術的レベルの高さは認めつつも、総合地球環境学研究所のありかたとしては、市街地に分散配置される方法もあったのではないかなどの意見も出され、自由な意見が交わされることとなった。

限られた時間で議論は尽くされるものではないものの、建築の在り方に対する、視点の置きどころを何処に据えるべきかの問われる課題を残してくれている点では、長坂、岡本両氏の二つの対比的なプレゼンテーションになったといえる。



「総合地球環境学研究所」内観

第3回デザイントーク（開催日2007年11月20日）

9月11日に引き続き11月20日は活躍盛りの年齢を迎えた佐々木栄氏（昭和設計）による兵庫県立考古博物館と独立後尖鋭な建築を打ち出している米田明氏（京都工芸繊維大学）にプレゼンターになっていただき本年第3回目のデザイントークが行われた。

佐々木栄氏（昭和設計）

発表作品 / 兵庫県立考古博物館

・兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨）

兵庫県立考古博物館は、史跡公園「播磨大中国古代の村」と一体的に計画され、兵庫県加古郡播磨の大中遺跡公園に建設された。館内では遺跡発掘の体験や各種展示、ネットワークゾーンなどが用意され、総合的な体験型、ネットワーク型の博物館として作られている。

背後には宅地化された住宅が押し迫り、立地条件にたいする間合いの取り方と、公園のあり方から配置は講演の南端部にまとめられ、半分地下に埋め込まれたように提案されている。特に住宅地と公園との関係においては、高さを抑えた全体計画が、ここに求められた全体ボリュームを抑えている点において、効を奏している。

各部の工夫においては回遊性が重視され、屋上に登れるルートを確認し、公園全体を俯瞰できるような展望台を用意するなど、至れり尽くせりの企画が盛り込まれている。また建築の大きさを控える一部の地中化、古来の種である「ちがや」を植えた丘の形成、発掘現場を思い起こさせるような「トレンチ」からイメージされた地層を思い起こさせてくれる空間、全体像を把握できる屋上の散策空間などの提案には、意欲的な仕事の取



「兵庫県立考古博物館」2F平面図

デザイントーク

り組みの痕跡が数多く埋め込まれている。同時に、各部位のデザインの必然性については、異論も出されていた。

このような大規模な公共建築物は、一般的にコスト管理から維持管理に至るさまざまな要望を調整するだけでも、マンパワーの許容量を超えかねないだけに、膨大な仕事量が背後に隠されており、一側面からの意見が、正解とは限らない。

ここでは設計の考え方と建築が目指した方向性的確さは確認されたが、駐車場につながる大きな狐狸ヶ池の風景がもう少し積極的に体験広場と連結できれば、効果が倍増されたのではないかとの意見が出された。

また屋上庭園の回遊性については、その利用される頻度と効果について、企画と実際の運用、建築的工夫について、公共建築物の抱える課題についての意見が交わされた。

この計画で設計上特に目を引くのは、六角形や長方形、円形等の幾何学形態が平面図にちりばめられ、平面エレベーションとして楽しい空間を思わせる魅力的なプランニングになっている。各図形を形づくっている講堂やミュージアムショップ、カフェや体験学習室などの余白が生み出す空間からは、公園の風景を垣間見ることができて、気持ちよさそうだ。しかし断面図において独立した空間性の強さが見えにくくなっている点については、各図形が生み出すであろう空間の個性が抑制されており、勿体ないのではないかという意見が出されていた。

また展望台となっている六角形の柱配置をもった展望タワーについては、古代という無意識的に流布されている造形イメージを直喩的に建築化することは、歴史的意味の希薄化を促進しかねない心配が潜んでいる。正確な歴史的あるいは考古学的な資料に基づかないシンボルの造形は、よほどの思慮を重ねた結果として打ち出されるように、企画レベルでの熟慮が望まれる点が指摘された。

米田明氏（京都工芸繊維大学）

発表作品 / BLOC / White Base / K clinic

・White Base（東京都小平市）

漫画家のためのスタジオ兼住宅であるという。空中に浮き上がった3階部分の黒いかたまりは、住居開口部を制限した住居の部屋が持ち上げられているという。これを支える下階の基礎にあたる部分は、スタジオとして大きく地下に埋没させられている。これを成立させるためにドライエリアからは十分な光を導入し、閉じられたワークスペースを居住性の良い空間に仕立てている。要約すればWhite Baseは地下に潜った空間ボリュームと空中に浮遊させたボリュームを上下に重ね合わせ、「地下から空中へ



「兵庫県立考古博物館」外観

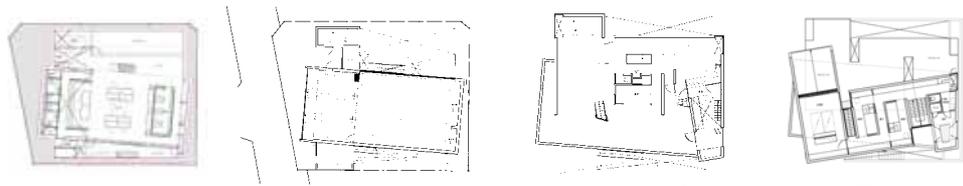


「兵庫県立考古博物館」内観



「White Base」外観

デザイントーク



「White Base」平面図(B1~3F)

のボリュームの置換」というワンフレーズにおいて、建築空間としての統合を収束させている。

それは既存街区に強烈なコントラストとして投入された異物として、否が応でも空間的文脈の緊張感を引き起こしている。しかしこの住宅兼スタジオは、外光には開いているものの、いわゆる街区の文脈における関係性においては、自閉的な構えをもって街に打ち込まれ、意図的な違和感が達成されているというべきであろう。

・K clinic (三重県名張市)

またK clinicは白亜の塊をまるで手品のように「空中浮遊」させて、驚きの空中居室を出現させた。これも一階部分のクリニックがその直上に浮かぶボリュームとの対比関係を生み出しており、ひとつの建築内で対比的な相互参照関係を生み出すことにより、空間構成の自律性を実現している。

それは結果的に従来のまちなみに投じられた異質物として、その衝撃力の強さにより強制的に図と地の関係を立ち上げ、「意味ありげなポテンシャル」を発生させている。

意表を突かんばかりに限界を思わせるキャンティレバーの使われ方は、近代建築においてあまたの事例を私たちは目にしてきた。その建築的隠喩に籠めてられてきた意味性は、浮遊感による重力の制御に託された人類の自信であったことは、ほぼお定まりの近代建築解釈として認知されている。

しかし米田氏の建築的表現としては、その定型的手法によるシンボリズムと簡単に納得してしまってはならないただならぬ気配を漂わせている。それが宇宙の中心性に沈み込もうとするシンボリズムとは遠い存在となっている点においては、銜気趣味と言われかねない際どい道を渡っているとさえ誰でもが感得するところであろう。それでは存在の強度を生み出している狙いがどこにあるのだろうか。米田氏によればそれはインデックスのような建築であるという。

イメージの源泉はロシア構成主義の時代、エルリシツキーの「プロウンルーム」で展開された空間の構築、記号性、象徴性に関する思索におかれているようだ。それは近代建築が抱えた空間構築の原点に返った議論を包含し、空間構成の知的展開を目指しているように思われる。対象と体験者の関係の不確定性を、いわば固定的な関係が結び結ばれないことを前提とした空間認識に対する米田氏の見方が提示されたというべきかも知れない。

コメンテーターからの反応は、設計者としての果敢な試みに対してエールが送られたことを報告しておけば十分だろう。



「White Base」内観



「K clinic」平面図



「K clinic」外観



「K clinic」内観

国宝閑谷学校と古民家再生工房住宅見学

岡田 良子

(Space Clip)



国宝閑谷学校と岡山で活躍するグループ「古民家再生工房」の住宅見学会と題して、10月13日に日帰りバスツアーを開催しました。

当日は、部会員やJIA会員など、定員を超える26名に参加していただき、薄曇りの早朝大阪を出発、バスに揺られること2時間かけて、備前市にある深い谷あいの村落、閑谷学校へ到着しました。早速、かまぼこ型のユニークな石塀と対面です。

寛文10年(1670)に創建されたこの学校は、地方のリーダーを育てることを目的として建てられた学校で、庶民を対象とした学校建築としては、世界最古のものと言われています。天下の三賢候の一人と呼ばれる藩主池田光政が「この地は読書・学問するによし」と言って普請させたもので、「切り込み剥ぎ式」と呼ばれる精巧な技術によって積まれたかまぼこ型の石塀は彫刻のように美しく、また講堂の後ろにそびえる「火除け山」を背景としたのどかなランドスケープは、延焼を防ぐという実用的な美を兼ね備えているだけでなく、不整形な土地を巧みに利用しながらも、魅力的な集落を作っています。

見ごたえのある国宝を満喫した後、岡山市内に入り、今回ご協力頂いた古民家再生工房のメンバー、大角雄三氏(倉敷建築工房大角雄三計室)と合流しました。古民家再生工房とは、岡山のアトリエを主宰する6人の建築家が集まってできた会で、古い民家を表層的な保存や修復にとどまらず、次につなぐ魅力的な住宅としてよみがえらせることを目的として1988年に立ち上げられた会です。

見学させていただいた黒谷の家は、茶室を含めると4棟の建物を長期間に渡り移築再生させたもので、傾斜地にすでにあった石垣をうまく内部に溶け込ませた建築です。「隅々まで使い切っていますよ。」という施主の言葉に、理想的な建築家とクライアントとの関係を垣間見ることもでき、気負いがちな伝統建築の手法ではなく、心地良いゆるさを感じる仕事ぶりが伺えて楽しい時間となりました。その後倉敷にある楠戸邸、楢村氏のアトリエを訪ね、最後に再生工房の神家氏にも加わっていただき、参加者全員との懇親会を行いました。

古民家を再生するというハード的な行為にとどまらず、建築家が再生後の建築の利用にいたるソフト的な面までプロデュースしている現状は、建築家が従来のはみ出で活躍することに大きな期待が持てた話だったと思います。

ストックの時代といわれながらも、法のしがらみになどにより安易な方向に流されがちですが、会の活動を通して建築と風土という新しい形が見えた見学会でした。



楢村徹設計室アトリエにて



かまぼこ型の石塀(閑谷学校)



国宝講堂内(閑谷学校)



廣栄堂(大角雄三設計室)



黒谷の家・茶室(大角雄三設計室)



倉敷楠戸邸 はしまや(楢村徹設計室)

新入会員紹介

兵庫県	三宅正浩	(株)y&M design office	大阪府	鳥羽聡一郎	(株)三菱地所設計大阪支店
京都府	瀬戸川雅義	(株)アールセッション	大阪府	中村武嗣	(株)双星設計
大阪府	岡田泰典	(株)日建設計	大阪府	長田直之	(有)アイシーユーク一級建築士事務所
大阪府	河野 修	(株)双星設計	大阪府	本田聡一郎	(株)日建設計
大阪府	佐藤教明	(株)日建設計	大阪府	南 隆	(株)石本建築事務所大阪支所
大阪府	鈴木 昭	(株)石本建築事務所大阪支所	大阪府	山本尚弘	(株)双星設計
大阪府	玉岡順石	(株)日企設計			

編集後記

今年の秋は、11月下旬でもいまだ暖かい日々が続き、近畿各地の紅葉は、半月程度遅く、12月初めにずれ込んだところが多かったようです。これも地球温暖化の明らかな影響と言えそうです。昨年夏、特に8月は、全国的に連日摂氏35度を上回り、記録的な猛暑となりましたが、そのときの編集後記で映画「デイ・アフター・トゥモロー」(2004年)の話を書きました。これは、温暖化の進行により海流異変(北極海での海流の沈み込みが止まる)現象が起こり、一気に地球全体が氷河期に突入するというストーリーでした。今年の9月、その北極海の氷が、専門家の予測より30年も早く縮小していることが報じられ、その水温も予想を超えて上昇していることが実際の海洋調査によって明らかになっています。私たちの身近な琵琶湖でも、この海流異変と同じことが起こっていつつあります。ここ数年、湖西湖北の積雪不足で、翌春の冷たい雪解け水が湖底に十分流れ込まず、湖水の大循環が起こりにくくなったために、大量の魚の死骸が上がっています。科学的な真理に「量質転化」というものがありますが、これは、物質に作用する力が一定量を超えると、一気にその物質の性質が変化するという法則です。この事はまさに、この地球温暖化により気候や環境がある時点で劇的に変化することを意味しています。最大のCO2排出国アメリカ、そして最大の発展途上国・中国もようやく温暖化防止の国際的なルールに参加の意志を示してきました。私たち建築家も、その総体として都市環境・地球環境に大きく影響を与える職能です。「すべての一つの建築の中に、如何に温暖化防止の工夫を盛り込んだ設計をしているか」。このことが、今の私たちの設計活動にとって、最も重要でかつ緊急を要するテーマであると改めて感じさせられた今日この頃です。
(広報委員長 小南一郎)

広報委員会

委員長 小南一郎(大阪)
副委員長 小池啓夫(大阪)
委員 一尾晋示(大阪) 井上 守(大阪) 大江一夫(兵庫) 太田恭司(大阪)
木戸口浩之(京都) 佐藤洋司(大阪) 澤村昌彦(大阪) 佐々木純一(大阪)
柴田敬四郎(奈良) 内藤 正(滋賀) 西濱浩次(住宅部会長)
橋本雅史(和歌山) 森崎輝行(兵庫) 横関正人(大阪)
事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日 2007年12月20日(秋号)
発行人 吉羽逸郎
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部
〒541-0051
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>
メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 「無題」(益田治子)